認知症ケアの課題と実践的なアプローチ

【第1回】

「家に帰る」と言われたとき

株式会社キューシップ　代表取締役・介護福祉士　梅本　聡

Profile うめもと さとし

1994年から特別養護老人ホームで生活相談員などに従事。2000年からは、認知症対応型共同生活介護のホーム長として、入居者が日常生活行為や家事で「自分でできることは自分で頑張る」を基本とした自立型・自炊型日常生活支援を実践。2015年介護コンサルティング等を手掛ける株式会社キューシップを設立。一般社団法人千葉市認知症介護指導者の会代表理事。著書に『認知症ケアの突破口』（中央法規出版）がある。

無理に止めない支援
――「帰宅願望」を行動として受け止める

認知症対応型共同生活介護事業所（以下「グループホーム」）でホーム長を務めていたときの話です。

入居者の高田さん（仮名）は大東亜戦争で東南アジアの激戦地で戦い、一心不乱にお国のために尽くしてきた人。息子夫婦と孫と暮らしていましたが、息子が他界。お嫁さんが一家の大黒柱となって働きに出るようになり、高田さんが孫の面倒をみる生活を送っていました。しかし、アルツハイマー型認知症により昼夜問わず屋外に出ては家に帰れず、孫の面倒どころではなくなってしまいました。お嫁さんは仕事と高田さんの介護で疲弊してしまい、高田さんはグループホームに入居となりました。

そんな高田さんは週に何度か「孫の面倒をみなきゃいけないから家に帰る」と言って帰ろうとされます。ある日も風呂敷に荷物をまとめて「家に帰って孫の面倒をみる」と玄関まで来られました。そして「そうですか。気をつけて帰ってくださいね」と介護職員が声をかけると外に出ていかれ、おもむろに歩き出します。

認知症対応型共同生活介護計画書において右の支援内容（計画化＝約束事）としていたので、介護職員はその後、計画のとおりに高田さんの後を追います。しばらくすると、高田さんは歩道の真ん中で立ち尽くしています。

「どうされましたか？」

「家に帰ろうと思ったんだけど、道に迷ったみたいだ」

「そうなんですね。この近くに私の職場があるのでそちらで少し休みませんか？　その間に地図で家の場所を探してみますので」

「わるいなぁ。そうさせてもらおうかな」

高田さんと介護職員の2人はグループホームに帰ってきました。

私は、「家に帰る」と言ってこられる認知症の状態にある方にたくさん出会ってきました。

●高田さんの支援内容

▶高田さんが帰ろうとされても職員は無理に引き止めない

▶外に出られたら、しばらくの間は本人に気づかれないように職員は後を追う

※途中1人で対処できない状況になった場合、事業所に電話をして応援を依頼するため、携帯電話を持っていくことを忘れないように

▶道に迷っている様子などが確認できたら「どうされましたか？」と声をかけ、本人と会話を交わしてグループホームに戻ってくる

※ただし、ユニットに職員が1人しかいないときは後を追うことができないので、その場合は、高田さんの「家に帰る」という意識を別のことに向けてもらい事業所内に留まっていただく